

# 書肆えん通信

No. 7

2019・2・1

書肆えん

秋田市新屋松美町

5-6

## 滑走路

小林 康子

約半世紀前に汽車通学だった仲間とつくった同人誌『滑走路』が思いがけず押し入れの奥深くにあった文箱よりあらわれた。

ガリ版刷りの手作りの同人誌。

痛々しいほどの迷える十七歳、夢を掴まえることができそうに思えた十七歳が五名集まり（北高生が四名、工業高生が一名）、滑走路という名前は私の案だった。この頃の私はドストエフスキーに夢中になっており、友は太宰治にはまっていた。

作家になりたく中央誌の新人ナントカ賞に応募したが当然音沙汰はなく、その一回で私の作家への夢はあえなくすばみ純な、ある意味わかりやすくもあつた

滑走路……………小林 康子 1

小林康子小詩集…………… 3

十七歳は友と同人誌をつくるう、という流れになったような気がする。

自分探しの青春の痕跡は傷のかさぶたを剥ぐような痛痒さがあり、その下には不器用な美しくない赤みが残っている。

手を汚してガリ版を刷り、創作について、社会への不満について、またたわいのない話でもりあがったあの小さな部屋に指し込んだ夕陽の輝きの美しかったことも残っている。

何かを求め、あえていたあの頃は無防備で懸命で今を生きていた。

『滑走路』が何号まで続いたのか友も私も記憶になく、パズルをあてはめようにもそれぞれピースを失くしており一号で終わったわけではないが長く続かなかつたことは確かである。

小学四年の時、クラスメートが病気で長く欠席した。

級友を想う私の詩が担任の先生にほめられ、教室の後の黒板に大きく清書されて一ヵ月間記されていたことがとてもうれしかったことを今でも覚えていいる。

そんな出会いがあったにしても湧きあがるような詩を書きたい思いをもったのは社会人として半ばの頃。

何があったわけではないが何かがあったのだろう。

心を病むひとたちと接し共に歩く仕事に就き、積もり過ぎた揺らぐ思いをどこかに放つ必要があったのかもしれない。

彼らは自らを阻害するものとまっすぐに向きあい、それ故に病名をつけられ、彼らを支える家族もまた支えを必要とする状況を日々目の当たりにし、仕事は好きだったが時折フウと大きく息を吐きだしたくなり私は年に数編の詩を書いた。詩は自由な羽をもつていた。

同時期、井川詩と随筆の会に誘われ会員となったことも寡作ではあったが書き続けられた要因の一つのような気がする。

平成二十三年一月夫が逝き、三月にあの東日本大震災がおきた。そして翌年は退職、と続き自分がからっぽくなったような浮遊感におそれあらためて詩を書

こうと思った。

この地で自分のいる位置を大切にしよう、ここにいる証として書きたいと思った。詩に逃げるのではなく詩と向きあいたい、と。

そうした思いでできあがったのがこの度の第一詩集『梟の森』である。

黄色に変色した謄写版の『滑走路』に私は「カラマーゾフの兄弟」についての随筆と詩を一編書いている。消してしまいたい気恥ずかしさを黒い文箱にもう一度入れ、蓋をした。



● 小林康子小詩集

秋のひかり

さわやかな  
まっすぐなひかりが  
降りてくる

山間の里に降りてくる  
澄みきったひかりの膜が広がる

里山に沿って歩く  
鳥の声が聞こえる  
足元からカサガサと  
枯れ葉の音がついてくる  
ひかりが私を包み  
心の底に透明な雫が染み込む

この地で暮らし

子供たちはみな飛び立った  
大家族だった記憶は  
私のなかで生き続ける  
秋のひかりは懐かしいひとたちを  
感じさせる

街の

人々の

ざわめきや轟音のない静かさの中  
柔らかなぬくもりのひかりに  
抱かれ

この山間のそこに息づいている  
彼らと交感する

白いレースを広げたような  
綾取りをしているような

烏瓜の花が

いつの間にか拳大の黄色の実となり  
ひとつふたつ下がっている  
秋のひかりを灯して

どこかでだれかが

どこかでだれかが母を呼ぶ

遊び疲れた幼子

草原のしまうま

水族館のイルカ

下り坂の景色にたたずむひと

雨が降ったから

おいしいおはぎができたから

何かが壊れてゆく音が聞こえるから

コスモスが咲き満ちているから

透明な絵の具で

上塗りするように

母に語りかける

老いた母のなかに若い母が重なり

遠い過去は

チクリとした痛みと

ぬくもりと

世界が静まり

ことばがひらがなのやさしさをもち

よみがえる

心に紗がかかっても

切れ間がのぞく一瞬

そこに母がいる

触れられる母がいる

深々とした

まどろみのような場所に

連れていつてくれる母を

どこかで

だれかが

呼んでいる

## 馬と満月

秋晴れの午後の競馬場

みごとに体軀が

時折のどよめきを切って走る

風をおこす

細い足を曲げ伸ばし大地を蹴る

たてがみが舞う

それぞれにつけられた

名前と番号をふり払い

走る

ゴール直前一頭がよろけ

腰が下がり騎手が落ちた

悲鳴があがる

追い越す馬への声援が沸く

裸の馬は前足を上げ

踏ん張り

立ち上がり

だれもいなくなったコースを  
再び走る

ゴールを過ぎて数メートル  
後足より崩れ

地面に腹をつけ

体が横になる

二度 三度

頭を上げ上半身を起こす

首をふり

腕うでき

前を見る

風が止まり

足を投げだした

上半身の彫像は前を見ている

あれはもう終わりという

声が聞こえる

時が行方をなくし

今日という日の幕が引かれた夜

暗い空に満月

漆黒の中

青い満月

馳せ向かう先に見えたのは  
きつとあの青い満月

## 運動会

太陽を追い越し

少年は走る

テープを切る一瞬の足が伸び

少女は走りぬける

ゴールの瞬間

時が止まり

歓声が一期に沸き上がる

黄色の鉢巻きの一年生が

毬のように跳ね飛ぶ

懸命は丸い形をしている

透明な空気を生み

まっすぐな音をだす

グラウンドにひかりの粒子が漂う

迷いのない

ひたむきさが輝く

転んだ下級生に上級生がかけよる

未来に重ねられていく

懐かしく

温かな

信じられるものが

青空の深いところから降りてくる

応援合戦の

ヘイヘイと歌う声が

空に吸いこまれ

子供たちの動きが梵字のように

なめらかに変わる

足裏から伝わる土の気配

赤青黄のポンポンが揺れる

解き放たれた思いが弾む

不確かな世界の  
くつきりとした確かさ

晴れた

九月の空の下

## 祈り

おみくじは小吉

そのおみくじに願い事を書き

カプセルに入れる

カプセルは筒の中を通り

カラカラと落ちてゆく

どこか遠くに降りてゆく

尾去沢鉾山

石切沢通洞坑の中の山神社さん

はるかの時代

手掘りで鉾床を探し続けた

あまたの人たち

ひかりを放つものに吸いよせられた

のみの跡が残る

見上げるほどの高さ

底が見えない深さ

狭い坑道が上へ下へと延びている

地層に閉じこめられた

希望の小片を掴まえようとした道が

生きるすべなさを砕こうとした道が

連なり広がる

沈黙の声が聞こえる

唄が聞こえる

山に入るひとの

送る家族の

千年の深い祈りは

積まれ

重なり

透明な石になり

淡いひかりを抱いている

地中の奥深く

ひんやりとした薄暗い広場の

小さな山神社

願い事は  
カラカラと降りてゆく

### 【後記】

詩集『梟の森』の中に、「滑走路」という詩があり、

一部五十円で売ろうと駅前に立った

急ぎ足の通行人に

声をかけた記憶はない

ブームの終わったダッコちゃんが

ぼつんとゴミ箱の上に乗っていた

一冊も売れなかった

という詩句に、一九六〇年代の新宿の地下道では、「私の詩集」と書いた看板を胸にして詩集を売っていたというエッセイをよんだことを思い出した。いまでも、「私の志集」としてずっと売っている詩人がいるようだ。

この頃の同人誌などは、ほとんどガリ版だったとおもわれるが、小坂太郎さんはそれを「ガリ版文化」と

よんでいた。草の根のメディアという意味合いだったように記憶している。

また、『滑走路』が発刊されていたことは、秋田県現代詩人協会のホームページの年表にもものっていないので、さっそく付け加えた。

そこで、「滑走路」にまつわる思い出を書いてもらったというわけである。

「小林康子小詩集」の詩は、去年から今年にかけて、さきがけ新年文芸、さきがけ詩壇、「あきたの文芸」などで、入選したり、推薦されたりしたものを掲載した。これだけでも活躍ぶりがわかるが、さらに短歌でも活躍している。

秋田魁新報（二〇一八・一一・三〇）によれば、「農業指導の傍ら数多くの歌を詠んだ石川理紀之助（1845～1915年）にちなんだ『第24回石川翁顕彰短歌大会』で、最優秀賞に相当する「天賞」を受賞されたという。歌は、『農はこれたぐいなき愛』の校歌聞くはればれと聞く甲子園の空。「選者の斎藤博さん（さきがけ歌壇選者）は『校歌聞くはればれと聞く』と畳み掛ける表現に、勝利を心から喜ぶ作者の心情が表れている」と評した」とあった。（J）